

行学院日朝關係の聖敎について

寺 尾 英 智

はじめに

では、日蓮遺文の注釈に關する聖敎に焦点を当てることにする。

日朝の日蓮遺文注釈書として著名なものに、『御書見聞』として知られる一連の著作がある。同書は江戸時代に出版されており、『日蓮宗宗学全書』にも収録されている。日朝の日蓮遺文注釈には、注釈書の執筆以外にも談義があり、聴講の学僧により聞書が記されている。この様な聞書については従来ほとんど注目されず、日朝の伝記研究においても取り上げられてはこなかった。⁽¹⁾しかし、中世における学僧の営みにおいて談義が重要な要素であることは、近年の隣接諸分野における研究によっても明らかにされている。⁽²⁾そこで、『御書見聞』との關係に注意を払いつつ、日蓮遺文の談義を記録した聞書を可能な限り抽出し、日朝の活動の中に位置付けることを試みたい。⁽³⁾

室町時代の日蓮宗における学僧として活躍した行学院日朝(一四三二―一五〇〇)は、京都本能寺・尼ヶ崎本興寺を開き八品派の祖となった慶林院日隆と共に東西の両学匠として並び称されている。日朝には、著作の他にも書写本、所持本がある。また、日朝自らが筆を執ったものではないが、著作と同様に扱われるものとして日朝の談義を門弟が筆録した聞書がある。これらの聖敎は、身延山久遠寺身延文庫を中心として各地に伝えられている。身延文庫に所蔵される聖敎については、日朝の部において著作、書写本、所持本の分類が行われているが、これらは一応の区分であって錯綜している部分も多い。また、日朝の部に収録されていない聖敎もあることが明らかとなっている。従って、日朝の著作及び聞書、書写本、所持本の全体像を明らかにするための基礎的な研究として、日朝關係の聖敎を網羅的に抽出する必要がある。本稿

一 文明年間に於ける日蓮遺文の談義

日朝が行った日蓮遺文の談義で最初に確認されるものは、文明三年（一四七二）六月の『撰時抄』である。日朝が日蓮遺文の注釈書である一連の『御書見聞』を集中して執筆するようになるのは、文明八年から同十三年にかけてであった。その中で『撰時抄私見聞』（『御書見聞』）の執筆は、同十二年三月以降のことである。注釈書の執筆に先駆けて、談義が行われたことになる。聞書は筆者未詳の上巻のみが伝わり、内題下に開始の日付が記されている。

〔当朝一—六〕『撰時抄上』⁽⁴⁾

（内題）撰時抄上聞書 文明三（辛卯）六月七日始之、

本書には、日朝の談義であることを明示する奥書等は記されていないが、本文に

サテ報恩抄、此御抄等ヲハ当寺ニテ遊ス也、

と記され、身延山久遠寺を当寺であると称していることから、日朝の談義の聞書であるとして誤りなからう。日朝はこの頃、久遠寺住持として大坊において盛んに執筆活動を展開しており、⁽⁵⁾談義も大坊において行われたものと考えられる。

次に日蓮遺文の談義が確認されるのは、文明十二年（二四八〇）の『秀句十勝鈔』である。談義が行われた日時に、日東の聞書には記されていない。聞書は冒頭部分を

欠いており、また丁数から考えて上巻に相当する一冊が別に存在したと考えられる。

〔他山・日東五〕『十勝抄』

（奥書）（略）／於身延山南房注之、駿河国村松海上寺之中納言（廿

六）日東（花押）

日朝上人之御談及^フ意^ノ程書註之也、定^テ法門義理不^レ可理
尽、乍恐加筆墨玉へ（云云、）

文明十二年（庚子）十一月四日

日朝は『秀句十勝鈔』の注釈書『秀句十勝抄見聞』（『御書見聞』）を同年七月一日に執筆し終わっていたから、談義は同書の執筆を元にして行われたものであろう。同年には、『秀句十勝鈔』以外にも日蓮遺文の注釈書執筆が集中的に行われており、或いは執筆と談義が同時平行で行われた可能性も考えられよう。

次いで文明十四年（二四八二）には、『開目抄』と『報恩抄』の談義が行われている。『開目抄』の談義は四月二日に開始され、ほぼ二ヶ月が費やされている。『開目抄』の注釈書『開目抄私見聞』（『御書見聞』）は、文明十一年十一月から翌十二年二月にかけて執筆されていたから、談義は注釈書を前提にしていよう。

〔他山・日東二〕『開目抄見聞』

（内題）開目抄聞書（私） 文明十四年（壬寅）卯月二日始之、
〔他山・日東二〕『開目抄見聞 下』

行学院日朝関係の聖教について（寺尾）

一三四

（内題）開目抄見聞（私下） 文明十四天五月日
（奥書）已上廿九日御談了、

於身延山片阿沢行学院之内学養房学室、書之畢、／（略）

駿河村松海上寺中納言日東之 廿八才

右此聞書、相州中将殿日恒、精書ヲ以テ、愚見之私ト校合シ
テ注之者也、是偏為愚案／注、敢不能長考之、披覽者也、
有損失者也、見之輩、可加添削者也云云、／（略）

文明十四年（壬寅）閏七月廿七日

筆者である日東は、日恒の「精書」と「愚見之私」即ち自
らが記した聞書を校合して、『開目抄見聞』を執筆したという。
ここに、談義における複数の聴講者の存在と、聴講者それぞ
れの手によって聞書が作成されていたことが窺える。そして、
聴講者それぞれの聞書を元にして、より内容の整備された聞
書が作成されていたことが明らかとなる。日東が二本を校合
して『開目抄見聞』を完成したのは、談義が終了してから三ヶ
月後のことであった。

このような聴講者の問題を明らかにしてくれるのが、『報
恩抄』の談義である。『報恩抄』の談義は六月二十日に開始
され、上巻が終了した後、七月から下巻の談義が行われた。
聞書は上下二巻に分かれており、上巻が二本、下巻が一本伝
えられている。ちなみに分巻の箇所は、上巻の本文が「法花
経ノ位ヲ取テ大日経ノ所領トセリ」で終了し、下巻の冒頭が
本文「日本国ハ慈覺・智証・弘法ノ流也」より開始されてい

ること、上巻の末尾に「報恩抄上巻」を書写したことを示す
（7）
奥書があることから、近世の版本『録内御書』と同一であ
る（8）。『報恩抄』の注釈書『報恩抄私見聞』（『御書見聞』）は、
文明十二年二月から翌三月にかけて執筆されていたから、談
義はやはり注釈書を前提にしていよう。

〔当朝一八〕『報恩抄見聞』

（内題）報恩抄見聞（私上） 於行学院日朝 文明十四（壬寅）六
月廿日始之、

（奥書）日朝聖人之御談

同座聴聞御人数／京都妙覺寺（相州）光乗房（鎌倉）
宮内卿阿（相州）中将公／麓房（出羽）浄心坊（駿河）
村松（中納言）（信州）少将公／（越前）十乗坊（相州）
一位公

承養坊日永

〔他山・日東三〕『報恩抄見聞 私上』

（内題）報恩抄見聞（私上） 於行学院 文明十四歲（壬寅）六月
廿日始之、

（奥書）報恩抄上巻写書了、

（略）／於身延山真乗房令注之云云、駿河村松海上寺之中
納言廿八

日東（花押）

〔日伝A四〕『報恩抄見聞私下』

（内題）報恩抄見聞（私下） 於行学院 文明十四（壬寅）七月始之、
（奥書）願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道、

日永の聞書である『報恩抄見聞』には、日朝の談義に同座

して聴聞した者が記録されている。この時、日朝の元には日永と同座十名、都合十一名の聴講者がいたことが分かる。同座者として挙げられている者の中で、「駿河村松中納言」は日東、「相州中将公」は日恒であり、前述したように共に『開目抄』の談義も聴講して聞書を作成していたのである。そして日東は、『報恩抄』の聞書も作成していた。聞書を作成したのは、恐らく日永や日東に留まらなかったであろう。

日朝は、少なくとも文明九年（一四七七）六月以降、久遠寺における活動の場を大坊から片隈沢の行学院へと移していた。⁽⁹⁾『報恩抄見聞』には、談義が行学院において行われたことが記されるが、談義の場所を記さない『秀句十勝鈔』や『開目抄』の場合においても同様であったと考えられる。

文明十五年（一四八三）には、『十法界明因果抄』の談義を行っている。同書の注釈書『十法界明因果抄私見聞』（『御書見聞』）は、文明十三年十月に執筆されていたから、談義はやはり注釈書を前提にしていよう。

〔当朝一——四〕『私見聞 十法界明因果抄』

〔内題〕十法界明因果抄私聞書 文明十五癸卯六月廿日始之、

談義が終了した日付は不明であるが、六月二十日に始められていることから七月に入ってからのものであろう。そしてこの後、九月に入ると、日朝は行学院を後にして相模国波多野郷の草坊に移っている。この時、日朝は久遠寺住持を隠居

したものと考えられる。⁽¹⁰⁾

波多野郷の草坊には、文明十七年（一四八五）半ば頃まで滞在したようで、同年八月には行学院に戻っていたことが確認される。草坊では、文明十五年十一月八日から『下山御消息』の談義を行っているが、この時の聞書は知られていない。翌十六年には、『二代聖教大意』の談義を行っている。

〔当朝一——三〕『一代大意書抄』

〔内題〕「」教大意抄私 文明十六甲辰五月一日

〔奥書〕于時天正第十年（壬午）五月朔日 下 常在寺沙門日念

この談義は五月一日に開始されているが、終了した日付は不明である。聞書の作成者も明らかではない。『二代大意書抄』は『日蓮宗宗学全書』⁽¹²⁾に収録され、従来『御書見聞』の一部として扱われてきたが、本文の形式からも日朝が直接執筆したものではなく聞書であることは明らかである。『日蓮宗宗学全書』において『一代大意書抄』の後半に続いて収録される『大意抄見聞』（他山・日恒七）についても、同様である。なお、『大意抄見聞』については首尾共に欠落があり、整足していない。

『二代聖教大意』に関係する談義であろうと考えられるものには、この他に『二代大意抄ノ朝』がある。

〔当朝一——二〕『二代大意抄ノ朝』

〔内題〕文明十六年（癸卯）卯月廿二日

行学院日朝関係の聖教について（寺 尾）

一三六

本書は表紙を欠失し、内題も無いことから、表題も仮に付されたものであるが、聞書であることは本文の形式から明らかである。日付は談義の開始を示したものと考えられ、『一代大意書抄』の前に行われた談義であることが明らかであるが、内容については今後の精査が必要である。

二 明応年間における日蓮遺文の談義

文明年間の後、日蓮遺文の談義が確認されるのは、明応四年（一四九五）十月の『本尊問答抄』である。同年七月、日朝は法華経の注釈書である『補施集』の法師品の部分を執筆中に発病したが、しばらくして病も癒え、八月二十四日に同書を脱稿する。続いて宝塔品を起稿し、十月九日には安樂行品、翌十日には勸持品を起稿する。⁽¹³⁾この様な中で同月二十三日から二十六日まで行われたのが、『本尊問答抄』の談義である。なお『本尊問答抄』については、既に『本尊問答抄私見聞』（『御書見聞』）として文明十二年（一四八〇）八月に注釈書を執筆していた。

〔他山・日任二〕『本尊問答鈔私聞書』

〔内題〕本尊問答抄私聞書 明応第四（乙卯）十月廿三日始之、

〔奥書〕（本云、）

明応四（乙卯）十月廿六日

於身延山久遠寺行学院御談了、

明応第七之天（大歳戊午）閏十月九日

於甲州市河庄落合草庵、以日恒・日任／両清書奉書写之者也、
願以書写功力、罪障消滅、出離生死、乃至法界、利益圓滿而已、

正観坊日任

この奥書に拠れば、『本尊問答鈔私聞書』は日恒の清書本と日任の清書本という二本の聞書によって書写したことが分かる。日恒、日任は共に日朝の談義に連なり、それぞれが聞書を作成していたと考えられる。日任の『本尊問答鈔私聞書』書写とは、自ら作成した聞書と他者の作成した聞書を参照してより良い聞書にまとめ直すという、いわば編集の作業であつたといえよう。

最も遅い時期に行われた談義として確認されるものには、明応九年（一五〇〇）三月の『末代法花行者位』（『四信五品鈔』）の談義がある。日朝は、同年六月二十五日に七十九歳で入寂する。同年における著作の執筆は知られていないが、日朝はまさに死の直前に至るまで教学の研鑽に専心していたといえる。聞書を記した日任は、『本尊問答抄』の聞書を記した日任と同一人である。

〔他山・日任三〕『末代法花行者位等事』

〔内題〕末代法花行者位等事 明応九（庚申）季春六日始之、

〔奥書〕已上八日御談訖、／（略）

明応九曆（庚申）三月晦日 日任

『末代法花行者位』（『四信五品鈔』）の注釈は『御書見聞』に含まれていなかったから、同書の注釈としても貴重な存在である。日朝は、同書の談義に八日間を掛けていたから、終了したのは三月十三日のことであつた。聞書の本文には談義の行われた日付が記されているので、談義の進み具合が明らかとなる。

三月 六日 題号釈。本文冒頭より「其中分別功德品四信与五品、修行法華之大要、在世滅後之龜鏡也。荊谿云、一念信解者、即是本門立行之首云云」（『定本遺文』一二九五頁五行目）まで。

七日 前日の説明の続き。本文「天台妙楽二聖賢定、此二処位有三釈。所謂或相似十信鉄輪位。或観行五品初品位、未断見思。或名字即位也」（同上六行目）より「予意云、三釈之中名字即者叶経文歟」（九行目）まで。

八日 前日の説明の続き。本文「就中、寿量品失心・不失心等皆名字即也」（同上二〇行目）より「又一念信解四字之中、信一字四信居初、解一字被奪後故也」（二二行目）まで。

九日 本文「問、入末法初心行者必具、円三学不」（二二六九頁二行目）より「問云、末代初心行者制止何物乎。答曰、制止檀戒等五度一向令称南無妙法蓮華経為、一念信解初随喜之気分也。是則此経本意也」（一四行目）まで。

十日 前日の説明の続き。本文「問曰、経文一往相似。将

行学院日朝関係の聖教について（寺尾）

又有疏釈。答曰、汝所尋釈者」（二二九七頁六行目）より「伝教大師云、二百五十戒忽捨畢」（二二九八頁一行目）まで。

十一日 本文「問、汝何不勧進一念三千観門唯令唱題目許」（同上三行目）より「妙法蓮華経五字非経文、非其義、唯一部意耳」（二一行目）まで。

十二日 本文「問、汝弟子無一分解但一口称南無妙法蓮華経其位如何。答、此人但非超過、四味三教極位」（二一行目）より「我門人等福過十号無疑者也」（二二九九頁六行目）まで。

十三日 前日の説明の続き。本文「夫人王三十代欽明御宇、始仏法渡以来」（同上七行目）より末文まで。

日朝の談義の席に連なつた日任が聞書をまとめ終えたのは同月晦日であつたから、ほぼ半月間の期日を要していることになる。

この他にも、明応五年（一四九六）に『観心本尊抄』の談義を行ったと考えられる聞書がある。京都妙伝寺に所蔵される筆者未詳の『観心本尊抄草案』は、日朝の弟子で妙伝寺を開創した日意の筆であるとされる写本である。書写年代は日意の時代まで遡らず、恐らく江戸時代であろう。本書は原表紙の外題に「観心抄（全朝談）」、内題に「観心本尊抄草案」と記され、奥書には次のようにある。

御本云、明応五年（丙辰）嘉平日
身延山久遠寺日朝聖人七十五才之時有講談之、

行学院日朝関係の聖教について（寺尾）

一三八

この奥書は、本書が成立した当初の本奥書をそのまま書写したのではなく、書写の過程で省略などが行われているように見受けられる。しかし、明応五年嘉平（十二月）に日朝は七十五歳であり、本文中でも身延山について「当山」と称していることなどから、日朝の談義の聞書であるとして良いのではない。明応五年には、前年から引き続いて「日朝A——一八〇四一」『補施集』の執筆が一年を通じて継続されていた。この執筆状況からすると、『観心本尊抄』の談義が行われたのは、三月下旬頃であつたろうか。聞書を記した人物は明らかではない。

おわりに

日朝の日蓮遺文に関する談義と聴講者が記した聞書について、検討を進めてきた。日朝の談義は、文明十二年から同十六年の頃にまとまって行われていた。同時期の談義は、注釈書『御書見聞』の執筆を追いかけけるようにして行われている。しかし、文明三年（一四七二）の『撰時抄』談義に見られるように、『御書見聞』執筆以前に遡るものもあつたから、必ずしも『御書見聞』の執筆と談義が連動していた訳ではない。また、入寂する明応九年（一五〇〇）に至るまで談義が行われており、日朝の活動における談義の重要性も明らかとなつた。

談義の場には、複数の聴講者が存在し、それぞれの手によって聞書が作成されていた。聴講者は、自らの聞書と他の聞書を参照し、新たに聞書をまとめ直すことも行っていた。ここに、聖教が生み出される学問の場の存在と、その具体的なあり方を垣間見ることが出来る。

『御書見聞』は、文献学的、実証的な注釈書であることが指摘される。⁽¹⁴⁾ 談義における注釈の具体的な方法・内容については、改めて検討を進めたい。

- 1 日朝の伝記については室住一妙『行学院日朝上人』（一九五一年、第二版・一九八二年）が詳細である。その他、北川前肇『行学院日朝の顕本論』（同『日蓮教学研究』、一九八七年）、身延山久遠寺編『行学院日朝上人』（一九九九年）など。
- 2 廣田哲通『天台談所で法華経を読む』（一九九七年）、永村眞『中世寺院史料論』（二〇〇〇年）など。
- 3 学術大会における口頭発表では注釈書である『御書見聞』についても種々論及したが、本稿では紙数の関係で省略した。
- 4 身延山久遠寺身延文庫架蔵。以下、身延文庫架蔵資料については、『身延文庫典籍目録』上・中・下により「」内に所蔵番号を示した。奥書などの引用に当たっては、句読点や文字を改めた場合がある。
- 5 拙稿「行学院日朝と身延山久遠寺——住持の隠居と継職をめぐる——」（『坂輪宣敬博士古稀記念論文集 仏教文化の諸相』、山喜房仏書林、二〇〇八年）。
- 6 現存の聞書は『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下『定本遺文』）

と略称する) 二三六九頁以下に相当する。

- 7 『定本遺文』一二二頁。なお、『報恩抄私見聞』(『御書見聞』第二における本文は『定本遺文』一二二五頁一〇行目より開始されており、『録内御書』諸本の分巻とは関連が見られない。

- 8 高木豊『開目抄』『撰時抄』『報恩抄』の分巻をめぐって—日蓮遺文の書誌に関する試論の一つ—(『大崎学報』一二八号、一九七六年) 五六頁。なお、日朝本『録内御書』における『報恩抄』は、欠失して伝わらない。

- 9 拙稿「行学院日朝と身延山久遠寺—住持の隠居と継職をめぐって—」。

- 10 拙稿「行学院日朝と身延山久遠寺—住持の隠居と継職をめぐって—」。

- 11 『日朝A四—六』。

- 12 『日蓮宗宗学全書』第一七巻(朝師御書見聞第二) 二九三頁—三六〇頁。同書三六一頁—三九四頁は(他山・日恒七)『大意抄見聞』である。なお、北川前肇氏は、『一代大意書抄』内題の日付、並びに『大意抄見聞』末尾の「朝師御代之日恒師筆跡」という日境奥書、波多野郷草坊へ日恒等が随行したようであることから、『二代聖教大意抄見聞』(『日蓮宗宗学全書』第一七巻収録本)を「日朝の講義を日恒が筆録したものと推測」している(北川、前掲書三九四頁)。

- 13 『日朝A一—四五』(『日朝A一—五二』(『日朝A一—五三』(『日朝A一—七七』)。

- 14 北川前肇、前掲書三九五頁。

〈キーワード〉 聞書、談義、日蓮遺文、日朝、身延山久遠寺

(身延山大学教授・博士(文学))

行学院日朝関係の聖教について(寺尾)

新刊紹介

津田 真一

『反密教学—改訂新版—』

A五版・三九四頁・定価三、二〇〇円
春秋社・二〇〇八年三月